

## スーダン 村落助産師の能力強化を目指して ～カッサラ州の復興支援プロジェクトでワークショップ

IDCJではJICAから委託を受け、システム科学コンサルタンツ(株)、(株)地球システム科学とともに2011年5月から、スーダンにおいて「カッサラ州基本行政サービス向上による復興支援プロジェクト」を実施しています。14年までの3年間で水、農業、保健、職業訓練分野における行政機関のキャパシティー・ディベロップメントを目的に合計257MM(人月)の投入が予定されている、非常に大型のプロジェクトです。

プロジェクトの保健クラスターは、村落助産師の現任研修講師に対して7月1～12日にコーチングのワークショップを行いました。カッサラ州では、妊産婦死亡率が244.9(出生10万対:2010国勢調査)と非常に高く、妊産婦は非常に厳しい状況に置かれています。母体死亡の90%以上は、出産前後に起こり、死亡を防ぐには、妊娠中からの継続したケア(異常の早期発見)、産科救急ケアができる施設へのアクセスが必要と言われています。

しかし、カッサラ州の85%以上の出産は自宅で行われており、コミュニティーの村落助産師や伝統的産婆に頼らざるを得ず、産科ケアへのアクセスも低いのが現状です。このように、母子保健サービスの強化が重要課題であり、保健クラスターでは村落助産師の能力強化を活動の柱の一つとしています。村落助産師は、産前ケア、分娩介助、産後ケア、保健教育など、コミュニティーにおける母子の健康にかかわる大きな役割を担っているのですが、そのほとんどが非識字者です。

プロジェクト開始後、100人以上の村落助産師を対象にした現任研修実施支援を行ってきましたが、講師らの指導法を向上させることが重要な課題の一つでした。一方的な口述に頼った講義と実習が中心の授業であり、受講者(村落助産師)に主体を置いた指導が全く行われていませんでした。特に非識字者において効果的な指導が必要でした。

ワークショップでは、実習の教え方、講義の教え方の研修を行いました。実習の教え方ですが、まず受講者を小グループに分け、村落助産師に求められる能力(技能、知識、望ましい態度)分析を行い、血圧測定、新生児蘇生など特に重要度が高いとされた実習の作業手順書を作成しました。作業をステップに分けることで、手順の振り返りをしやすくし、キーポイントやその理由を明確にすることで、重要な手順を正確に、印象強く、覚えやすくすることが狙いです。



研修の修了証を手にして笑顔の講師たち

次に、作業手順書を元に、コーチングの実習が行われました。特徴的なのは、講師がそれぞれ異なる形式で同じ手本(例えば血圧測定)を3回繰り返すことです。

1) 極力話さず、作業を手際よく、上手にやってみせることで、学習者(村落助産師)が作業の全容を把握し、「自分もできるようになりたい」という意欲を促します。2) 同じ手本をステップごと言葉にしながらかやってみせます。非識字者にとっては、作業手順を思い出す為のインパクトを与える効果があります。3) 3回目の手本で、キーポイントを挙げながら細かく説明し、やってみせます。

一方、講義の教え方ですが、自分と他者の講義を振り返りながら講師のスキルアップを図りました。1) まずは、各自、講義の指導案を作成します。2) 次に、作成した指導案に沿って、各自プレゼンテーションし、プレゼンテーションを聞いている側が、他者評価を行います。3) プレゼンテーションはビデオで録画され、プレゼンテーションが終わった後、別室で、自分のビデオを見ながら、他者評価を確認します。同時に、各自が自分の講義を自分で評価します。このように、教える技術の習得だけではなく、学習者である村落助産師の心理を経験し、各自の講義にフィードバックします。

研修を受けた講師からは、新しい視点と経験を得たと好評でした。これからの研修がどう変化するか楽しみです。

(文責:国際開発センター 研究員 諏訪 裕美)

(\*注) JICA技術協力プロジェクト プロジェクトニュースの記事「講師へのコーチング研修:村落助産師への効果的な指導を目指して」(<http://www.jica.go.jp/project/sudan/005/news/20120712.html>)を基に改編